

ピエモンvsピエモン

究極体同士が向かい合う、燃えるような髪、ビスクドールより血の気の失せた肌、滑稽さより毒を感じさせる派手な装い。

全てが双子のように鏡に映したようにそっくりな、2体の道化師...ピエモン。

神田颯乃とジョーカー・クラウン、同じ型のデジヴァイスを使い、同じようにデジモンと融合する形で究極体へと進化する極めて近い2人。

多種多様な使い手が集まるアリーナでもここまで要素が一致する究極体同士の対戦は珍しく、2体が向き合うだけでも観客のボルテージは高まっていく。

「長い事やってるけどこんな同型対決初めてだよ、テンション上がるね」

片方のピエモン、その中に融合する男ジョーカー・クラウンが眼前の同型の中の少女に笑いかける。雌雄を決する場に似つかわしくない真剣味に欠けた声、それに少し眉をひそめながら颯乃はパートナーと一体化した両手を掲げ応える。

「私もここまで似た相手と戦うのは初めてだ、お互い手の内も同じ...だからこそ、先手はいただく」くすくすと笑ったままのジョーカーのピエモン、その四肢に狙いを定め剣を放った。

空間を跳躍し相手を串刺しにする形で現れる必中のトランプソード。

最初にこれを放った側が優位に立つと、誰の目にも明らかなピエモンの代名詞。

ジョーカーの無防備な四肢を正確に貫いて剣が出現する、その位置に甲高い音と共に火花が散った。

「何を...した？」

「こっちの台詞だよビックリするなあ、サムライガールってもつといいざ尋常にとかチェストーとか言って斬りかかるもんだと思ってたのにいきなり手足潰そうなんて、見てる側もつまんないよクラウンの自覚持とう？ あっボクファミリーネームの話じゃなくてね？」

少女の動揺も観客のざわめきもどこ吹く風と、勝手なお喋りを続けるジョーカーを見かねたピエモンが奇妙な火花の正体を語る。

「君達が狙った場所に私達もトランプソードを出現させたただけだ、細かい仕組みは私も知らない、ただそうするとどちらも正しく出現せず、さっきのように無害なノイズになって弾けて消える」

同質同量同形状が同じ場所にほぼ同時に転移すると形を成せずに爆ぜる。

それを狙って起こすには転移してくる全てを正確に把握しなければいけない。

「まあピエモン同士だから出来る技だよな、つまりキミ達も出来る...っていうか出来ないやつまらない」

「...っ！！」

笑みの形は変わらないまま、ずるりと肌に纏わりつくような殺気と共に放たれた微かな何か、それに重ねる形で颯乃とピエモンはトランプソードを放つ。

両手と両の太腿、4カ所で甲高い音を立てて火花が散った。

放つ側と合わせる側が逆転した再演の成功、期待通りの結果に男は笑みは深め、その両手に剣を出現させる。

「楽しめそうで何よりだよ、大道芸は終わりにして...斬り合いと行こう」

応じて剣を握ったピエモンが胸の中の少女に問いかける。

「想定外の形だが...、戦えるな颯乃」

「誰に言っている、私は元々剣士だぞ？、ふふっ...そうだこの力と先入観に囚われて忘れていた、剣は握って振るものだ」

動揺は既に消え去り、本分を思い出した少女の顔には眼前の相手につられるように不敵な笑みが浮かぶ。

究極体同士が向かい合う、燃えるような髪、ビスクドールより血の気の失せた肌、滑稽さより毒を感じさせる派手な装い、手には冷たく光る剣。
全てが双子のように鏡に映したようにそっくりな、2体の道化師の戦いの幕が上がる。